

いまこそ、学校と 保護者は連携するとき

社会で力強く生きていく生徒の育成を考える
うえでは、学校だけでなく、地域や保護者との
連携の重要性も増しています。そこで、全国
高等学校長協会会長・宮本久也氏と全国高等
学校PTA連合会会長・佐野元彦氏に、両者
のあり方について大いに語っていただきました。

取材・文／清水由佳 撮影／清水一也

核家族化の中で、子どもへの 関わりを強めたい保護者

佐野▼最近、PTA活動などで、父親
の関わり方が濃くなってきたなと思
いますね。「親父の会」を作ったり、積
極的にPTA活動などに参加される
方が増えているように思います。

宮本▼その通りですね。学校の保護
者会でも男性の姿が増えています。
ご夫婦でいらっしゃる方も、昔に比べ
ると圧倒的に多いですね。

佐野▼全国高等学校PTA連合会と
キャリアガイダンスの合同調査でも、
保護者が今後、子どもに何かを行って
あげたい、行いたいという意識が増加

全国高等学校PTA連合会
会長

佐野元彦氏

さの・もとひこ●4人の男の子の父親として、長
年PTA活動に参加。現在、秋田県高等学校
PTA連合会会長も務める。少子化の中、保護
者同士の情報交換などを通じた子育て支援の
必要性を実感している。

全国高等学校長協会
会長

宮本久也氏

みやもと・ひさや●東京都立西高等学校校
長。都立西高校は、全日制24学級で、ほぼ
全員が大学進学を目指す進学校。平成27
年には第9回キャリア教育優良校文部科学
大臣賞を受賞。PTAとの連携にも力を注ぐ。



PTAとの関係がうまく回らないと、 学校自体も回らなくなっています

していますし(図1)。

宮本▼学校でも、昔よりも子どもへの関心、関わりが大きく強くなってきたりと実感します。それは、世の中全体がそうならざるをえない状況なんだと思いますよ。核家族が増え、子どもたちは、昔のように地域で小さいころから何かをしてきたという経験も少ない。社会のさまざまな情報を学校以外で得ようとする、保護者以外にはないんです。昔であれば、おじいちゃん、おばあちゃん、親戚の人、地域の人など、いろいろな世代の経験が折に触れ耳に入ってきて、「お父さんはこう言っているけど、あの人はこんなふうに言っていた。じゃあ、自分はこうしよう」と、自分で考えることができな

たんです。ところがそういう機会が減ってしまったので、キャリア教育が必要になりました。保護者の方々も、関心のある人はいろいろ調べたりして、子どもと関わっていきましょう。佐野▼そうですね。その一方で、影響の度合いの大きさを認識して慎重になる保護者の方もいらっしゃると思います。

分の仕事の話をするというのは、やはりしづらいい気持ちも働きます。だからこそ、少し触れただけでも「話している」と思うんですよ。子どもは、雑談の中での愚痴くらいにしか聞いていないでしょうが(笑)。調査でも、保護者の7割近くが「仕事の内容や楽しさ、大変さをよく話す」と答えているのに、高校生は4割程度にとどまっています(図2)。

宮本▼親が話をしているつもりでも子どもは聞いていないというのは、昔も一緒で(笑)。ただ、昔は「親の背中を見て育つ」ということがありましたが、親の仕事もブラックボックス化してそれが難しくなっています。子どもから見ると、毎日親が職場で何をしているのかがわかりづらい中で、話をするといいと思いますよ。

佐野▼そうですね。首都圏に限らず、地方都市でも、暮らしの場が社会とながらなくなってきたりしているというご家庭が、以前に比べて増えてきていると思います。

ます。また、子どもに面と向かって自分の仕事を話をするというの

図1 子どもの進路選択への関わり方●行ったことがないが、今後行いたいこと (進学希望者、各単一回答)

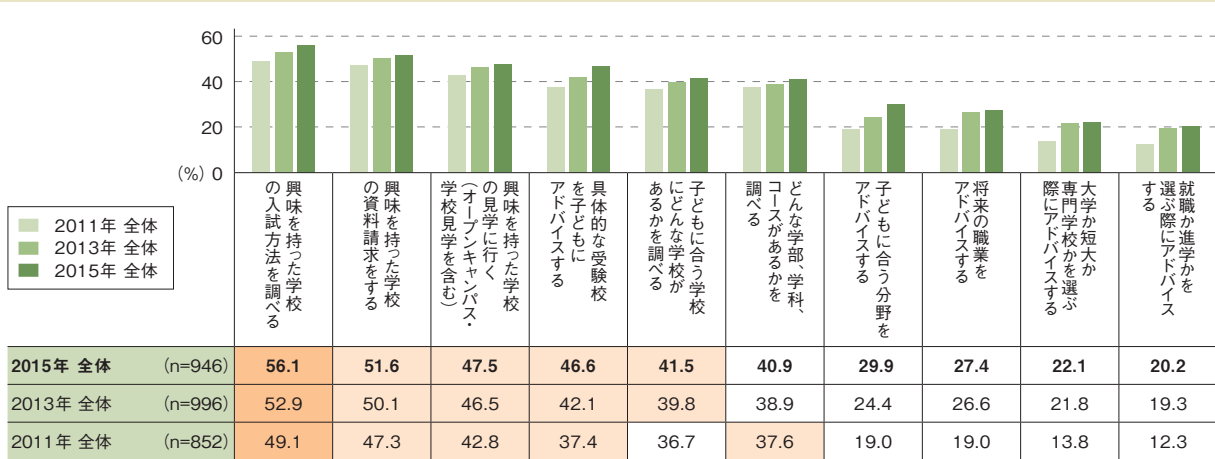
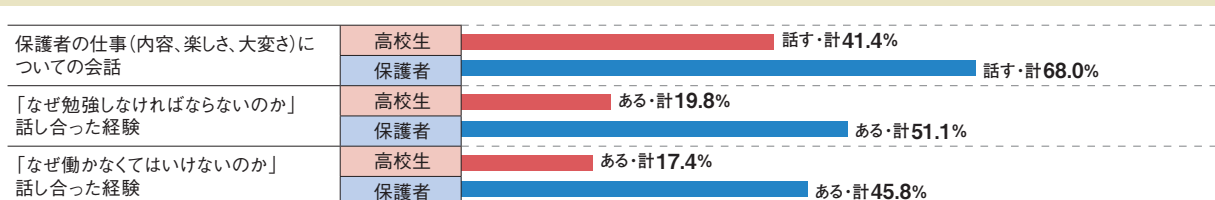


図2 保護者と高校生のコミュニケーションの状況 (高校生・保護者/各単一回答)



資料：第7回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」一般社団法人高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ合同調査より

PTAは、保護者同士の 子育て情報交換の貴重な機会

宮本▼積極的に関わっていいこうとする保護者がいる一方で、まったく関心を持たない方がいるという「二極化」も進んでいますね。子どもに任せているという和良好的ですが、ご家庭の状況が多様化して、暮らしていくのが精一杯ということも。小さな子どもを預ける先がなく、保護者会にも出られないということもあります。そういった周辺環境のセーフティネットの減少の中で、学校がかりうじて組織的に役割を果たせることがあるのではないかと思っています。

佐野▼そうなると思います。いろいろな要望が出てきて大変ですよ。

宮本▼だから、PTAとの関係がうまく回らないと、学校自体も回らなくなってきたと思います。子どもをどう育てていくか、今まで以上にお互いが話し合っていく必要があると考えています。

佐野▼そうですね。例えば、いつか話題になったモンスターペアレントのようなことでも、対学校の大きな問題になってしまいう前に、PTAの中で解決していこう。そんな動きの芽が出始めています。



Motobiko Sano

宮本▼PTAの役割も変わってきていると思います。先ほどの核家族化に関連して、子育てに関する情報が入ってきづらく、保護者自体が孤独になりがちです。多少うまくいかないことがあっても、「そんなに心配しなくても大丈夫」と言ってくれる人がいればいいのですが。そこで当校では、学年を超え保護者同士で話ができる機会をつくるようにしています。そうすると、下級生の保護者が心配や不安を口にしても「この学校では2〜3年後にこうなっていく」といった体験談が出てきて、安心できるようです。

佐野▼昔でいう井戸端会議のような役割でしょうか。確かに、PTAや部の保護者会などが、子育て世代同

士、いろいろな不安や悩みを打ち明けたり、情報交換したりといった場になっています。

保護者と学校は身内同士 互いにオープンでありたい

佐野▼子育てについてだけでなく、学校や日本の教育について、保護者の「知りたい」という気持ちが強くなっていると思います。学校のこと、日本の教育がどう変わっていくのか、学校ではどう学んでいるのか。批判ではなく、理解をして、先生たちと協力して子育てしたい。そういう視点で「知りたい」という気持ちが増えているように思います。

宮本▼そうですね。その点当校では、

さまざまな形で保護者の方との接点を持ち、情報提供をするように、PTAと協力しながら行っています（コラム参照）。その開催も、平日の夕方と土曜日など、異なる時間帯に同じ内容を繰り返し行うことで、少しでも多くの保護者に参加していただくよう工夫します。また、保護者会での配布資料も一般には公開せず、保護者にだけ配布する生徒の本音コメント満載の合格体験記などもあります。保護者は身内。ノックさえしてくれれば、どの学校でも、それぞれに情報を持っています。遠慮せず、学校に聞いてもらうことが大事です。

佐野▼うまくいっている学校は、オープンで、いつでもどうぞという状態をつくっていますよね。保護者と学校が話し合う機会をいねいにつくって、先生と話ができることを習慣化してくれています。



Hisaya Miyamoto



都立西高校の取り組み

通常の保護者会とは別に、「校長先生と語る会」をPTA主催で年2回(10月、11月)実施。1テーブル10人程度のグループを10個くらい作り、校長・副校長・学年主任・生活指導主任などが、それぞれのテーブルを回り、本音で語り合う。15分ずつくらいという短い時間ではあるが、間近に日頃の疑問や不安をぶつけることができると、好評を得ている。しかも、参加する保護者の学年を交ぜているので、互いに情報交換の機会としても生かされている。

そのほか、土曜日には保護者も参加できる教養講座(哲学やシェークスピアを原書で読むなど)を開催したり、夏休みに生徒と保護者と共に歴史散歩に行くなど、単に保護者会だけでなく、さまざまな機会を通じて学校と保護者が交流できる機会を設けている。

子どもたちの自己実現と幸せを願っているのは一緒です

「チーム学校」として、保護者の力を巻き込む工夫を

宮本▼そもそも保護者会になかなか来てくれないという悩みもあるようですが、結局、働きかけをやめず、情報を発信し続けることが大事です。こういうシチュエーションや内容なら

来やすいかということ、PTAと相談することも必要でしょう。アプローチのしかた、ちょっとでも来てみたいと思ってもらうしかけづくり。そこに、PTAとの協力は不可欠です。

宮本▼さまざまな機会をつくって保護者とお話しするようになると、確かに耳の痛い話もたくさんいただきます。「あのクラスの先生はいいけど、どうしてうちの先生は…」など、直接担任や部活の先生には言えない不満を、校長だからとおっしゃっていただくこともあります。でも、そういう話ができること自体が重要だと思います。聞いてもらう機会もなく、不安や疑念だけが膨らんでいくと、お互いに不幸。直接話し合うことで相互理解を図ることが大切です。

佐野▼キャリアの浅い先生の中には、保護者と話をするのが怖いと感じていらつしやることもあるようです。で

も、変な考えを持った保護者ばかりではありませんし、究極は、子どもたち自己実現して幸せになってほしいと願っているのは一緒です。恐れずにオープンにすることが大事だなと思います。学校教育の現場にいろいろな要請が来ている中で、保護者としてもっと関われる部分があると思います。キャリア教育でも、いろいろな経験を持ち、地域社会とつながっていくことは、保護者のほうが得意だったりもします。「チーム学校」として、保護者が仲間として力を出していければと思います。

宮本▼その通りですね。目の前にいる子どもたちに、いかに力をつけさせていくか。目的は一緒なんです。ただ、どういう力をどこでつけさせるかというのは、時代の変化などもあります。

我々は教育のプロとして、今求められていることが何なのか、そこをわかりやすく保護者に伝えていく。それが、学校・校長の役割だと思います。

佐野▼例えばキャリア教育の重要性に関しても、わが子と思うと視野が狭くなって「それより学力を。英単語の二つでも」と言いたくなるのですが(笑)。職場や世の中を見ると、本当はキャリア教育が重要だとわかっていて、人とのコミュニケーションがなければ生きていけない、仕事にならないと、痛感しているんですが…。そういう目指すべき方向を、根気強くメッセージして、保護者もぜひ巻き込んでいただければと思います。

